

森繁の「ヴァイオリン」、再び

一昨年東京・帝国劇場で六九月のロングランを行った森繁久弥の「屋根の上のヴァイオリン弾き」が、今年また四月月のロングランに入る。すでに二十四日までの予定で名古屋・中日劇場で上演中(二十四回)で、四月一日から六月三十日までが帝都(八十四回)というスケジュールだ。公演が終わると初演以来の上演回数が八百十五回になる。

今度は4ヶ月ロングラン

一昨年の公演が終わった時、森繁は「またやる」という約束をしなかった。

このミュージカルで森繁の演ずる主人公デヴィエはほとんど出づっぱり、当時すでに六十九歳になっていた森繁には、体力的

に自信が持てなかったのだ。しかし、東宝本社には再演希望の投書があつたを絶たない。

「役者なんてバカなもので、そういう声を聞くとまたやる気になりましてね」と森繁は苦笑する。ただしやる以上はこれまでのコピーではつまらない。今年主要メンバーを大幅に入れ替

主な配役を一新 70歳超え燃える

えるのも、「全部解体して、たまったチリやゴミ、シミを洗って、改めて組み立て直そう」との狙いからという。

三月から仕立屋のモートル(長女のむこ)が本田博太郎(これまで富

松千代志、ロシア人の学生フョードカ(三女のむこ)が金田賢一(同谷岡弘規)になり、さらに五月からは次女ボーデルが森山良子(安奈淳)、三女チャバがジュディ・オング(松岡由利子)、フョードカが金田から舊目亮に代わる。

「歌うな踊るなとサミー・ベイス(演出・振り付け)がよくいってんだけど、その心は歌手になつてはいけない、ダンサーであつてはいけない、大切なのは役の人物として存在することだ」といふ教えです。だから前の役者がどうだったなんていうなといつてるんです。前と違うのが当たり前なんです」

「全体としてもういぶん変えてますよ。これまでは伏線の張りかたで苦労してきた。それが今邪魔になつてるところもあります。それをよく作業と、そこに新人たちがどう溶け込んでくるか、楽しみです」

森繁の熱弁はとどまることをしらない。今度の公演中に七十二歳になる人とは思えない気迫だった。



左から舊目亮、ジュディ・オング、金田賢一、森繁久弥、森山良子、本田博太郎